

十五分で読む日本近代史入門講義

加藤 陽子

一 はじめに

この文章を読もうなどという奇特な考えをもたれた方であれば、日本近代史の入門講義が十五分で読めてしまうはずがない、そんな馬鹿なことがまかり通れば世の中の苦勞はしないはず、などと考えつつ本稿を読み始められたのではないのでしょうか。まさにそうです。私が読者としたいのはまさにそのような臍曲りの方々であります。

私が東大文学部で近代史を教え始めてから早いもので十五年がたちました。十五年選手といえ世の中の基準では相当なものはずですが、私の場合、学生アンケートなどをとってみると「先生の熱意は伝わるのですが、

教える題材、史料が未だ十分に厳選されていないので、少しわかりにくいです」などという感想を未だに受けとる始末で、不惑をとうに超え天命を知るべき歳に最接近しても、教える道の極意を掴んだとはいえません。

本来は究極の近代史入門講義をお届けすべきなのですが、このような事情でありますので、本日は、東大文学部へ三年生の時点で進学する教養学部生の二年生向けに開講している入門講義の一部をご覧にいれようと思えます。それでは、さっそく始めましょう。

二 本郷の教育

こんにちは。本日は第一回の入門講義ですので、三年

生になって進学される本郷キャンパスでの教育、文学部での進学にはいかなる特色があるのか、まずはその点についてお話ししておきたいと思います。私が東大に赴任した時の総長である吉川弘之先生は、本郷での教育の特徴をこう表現されたことがあります。ある時代までの大学での教育とは「先生のようになること」を意味していたと。つまり、教育とは、先生の一举手一投足を注視しつつ学生が自ら学ぶもの、ということですね。吉川先生のお話の含意は、そのような前時代までの「放牧」教育（まさに、東大の教養学部の通称は「駒場」です）は、良い面も確かに多くあったが、現代の大学教育では通用しない、との趣旨でした。

少し想像すればわかるのですが、実のところ放牧教育というのは、教える側の身に、コストと時間の負担を最もかけずに最も優秀な後継者を見いだす合理的な方法でありました。最も優秀な学生を百人の中から一人だけ選べと言われたとき、放牧されていても師匠の一举手一投足を注視しただけで万事を悟れるような学生を選べば間違いないのは確かでしょう。つまり、ある時代までの大学は、後継者を放任の体制で最も効率よくコストをかけ

ずに選ぶ濾過器であったわけですね。しかし今や、大学という公器を、一学問一研究者の学統の保持など、限られた動機で用いてはならないのは当然のことです。

ただ、今回この話から入りましたのは、吉川先生のお話の趣旨とは少し離れまして、前時代的な放牧教育の時代であっても、やはり教師たるもの、広い意味での「教育」をしっかりと行なっていたのではないかと、とのお話につなげたかったからです。東京帝国大学時代の文学部の「先生」といえば、夏目漱石の名前がまずは浮かびます。明治三九（一九〇六）年、日露戦争の終った翌年の二月一五日、漱石が門下の森田草平に宛てた手紙が残っています。『漱石書簡集』（岩波文庫、一九九〇年）所収のものから引用しておきましょう。森田草平は、この二年後、平塚らいてうとの心中未遂事件を起すことになりました。君なども死ぬまで進歩するつもりでやればいいではないか。作に對したら一生懸命に自分のあらん限りの力をつくしてやればいいではないか。後悔は結構だがこれは自己の芸術的良心に對しての話して世間の批評家や何かに對して後悔する必要はあるまい（中略）僕は君において以上の長所を認めている。

何故に萎縮するのである。今日大なる作物が出来んのは生涯出来んという意味にはならない。たとい立派なものが出来たって世間が受けるか受けないかそんな事はだれだって受け合われやしない。ただやるだけやる分の事である。

漱石が、まことに温かい、ありがたい言葉を門下生に投げかけていることがわかります。漱石自身、この一年後、大学の職を辞して朝日新聞に入社していますので、さまざまな迷いを抱えていた時期と拝察されますが、学生・森田草平に向かつては、自分のやりたいことを全力で伸び伸びやれば良い、とのエールを送っていました。漱石にあやかかって述べますと、専門課程を学ぶ本郷に進学して皆さんに学んで欲しいのは、①自分の考え方を説得的に述べる、そのための材料・資料の集め方を身体で知ること、②他人の考え方を道理にしたがって批判する、その実際の方法を身体で知ること、当面はこの二点です。

三 近代を対象とする歴史学の始まり

近代史学といった場合、二つの意味があると思います。

一つは時間軸としての近代を対象とする歴史学の意味、すなわち「近代の歴史」を意味する場合です。いま一つは歴史学が近代的な学問としてのかたちを整えたという意味、すなわち「近代的な歴史学」を意味する場合です。後者の、近代的な歴史学の誕生といった場合には、ランケ、デルブリュック、リースといった学問の系譜をたどることになります。東京帝国大学での近代的な歴史学の基礎を形成したのはリースでしたが、こうしたドイツの実証史学の流れについては、H・U・ヴェーラー編、ドイツ現代史研究会訳『ドイツの歴史家』全五巻（未來社、一九八二年〜八五年）を参照してください。

この講義では、前者、近代を対象とする歴史学の誕生について話をいたします。まず問題となるのは、時代区分の概念として「近代」をとらえた場合、何をもち「近代」の画期とするかということですが、いくつかの説明が可能でしょうが、ひとまず、(i) 共同体の解体、(ii) 身分制の解体、(iii) 市場を軸とした再生産、などが、近代の画期とされます。こうした指標については、三和良一編『概説日本経済史〔第2版〕』（東京大学出版会、二〇〇二年）などが参考になります。三和先生の場

合は、経済史の専門家ですから、資本制生産を可能とする社会が近代の指標になっていますが、これを政治史から見ると、またおのずから別の像が描けるはずです。

東京帝国大学法学部で欧州政治史を講じていた吉野作造は、「近代」の画期を近代的政治意識の有無に置きました。法学部において吉野作造の後任となった岡義武は、「近代」の画期を、対外的独立の達成に置きました。近代を対象とする歴史学を築いた学者として、この講義の前半部分では、吉野作造と岡義武の二人の学問的業績をとりあげましょう。

(一) 吉野作造

吉野作造は、「近代的政治意識」というものを、初めて学問の対象とした学者でした。「我国近代史に於ける政治意識の発生」は一九二七(昭和二)年に執筆されたもので、『吉野作造選集 一一』(岩波書店、一九九五)に所収されています。昔に書かれた論文といいますが、非常に難解かも知れないと思われるかもしれませんが、吉野の場合は文意が明晰で読ませる文章なので非常に面白く読めます。

問題意識を述べた冒頭部分は、こう始まります。「永

い間の封建制度に圧せられ天下の大政に容喙することを一大罪惡と教えこまれて来た日本国民が、近代に至りていかにして突如政治をもってわれら自身の仕事なりと確信するに至ったか」。吉野にとつてみれば、「民は依らしむべし知らしむべからず」とされてきたはずの我々の父祖が、何故に突然、政治を「自身の仕事」と捉えるようになったのか、この「問い」に対する答えを見つけることが論文の目的であると宣言されています。

幕末、尊王攘夷論一本で討幕に導いた雄藩の討幕派からなる新政府の首脳は、明治初年の人々の排外熱の処理に苦しんでいました。攘夷論を上手く処理し、開国和親へと導かなければ、英国をはじめとする列強からの信頼を政府は失うことになります。そこで、岩倉具視などを中心とする新政府が取り組んだのは、万国公法というもの存在を、国民すべてに広く知らしめる啓蒙活動でした。そこで、国民は「我々は外人を夷狄禽獸と思つておた、だから之等の者と交るのを快しとしなかつたのだ、然るによく聞いてみると、彼等にも宇内の公義の理解があると云ふ、而して我々に対つては天地の公道を以て交らうと云うて居るさうだ、然らば我々も亦彼等を待つに

その所謂公法を以てすべきではないか、猥りに之を排斥するは古来の仁義の道に背くのみならず、又恐らくは彼等の侮を受くるとにもなるう」と教えられることになり
ます。

吉野は結論として、父祖たちが政治を自分自身の仕事と捉えるまでに政治意識を活性化させた背景として、政府側の施策の、ある意味での巧妙さ、すなわち「封建時代の教育において鍛えられた「道」に対する敬虔の態度を、そのまま舶来の公法にも捧ぐべきを教え」た点に求めました。天賦人權論が民権派によって唱えられる前、近世から近代へ移行する時の、政府当局者（討幕攘夷派）の対外態度の変化（攘夷から開国和親へ）から、国民の政治意識の変化を説明した点に、吉野の政治史家としてのリアリズムが確認できます。

（二）岡義武

次に、一九三五年に書かれた岡義武の論文「明治初期の自由民権論者の眼に映じたる当時の国際情勢」を見ておきましょう。この論文は『岡義武著作集 第六巻 国民的独立と国家理性』（岩波書店、一九九三年）に所収されています。岡の特筆すべきところは、明治政府の対

外関係への取組みを、国内問題と連携させて学問の対象とした点にあります。吉野の「問い」は、近代的政治意識が何故生じたのかというものでしたが、岡の「問い」は、日本の民権論には欧州のデモクラシー論にある個人主義的な色彩が弱く、国権論のロジックが強いのは何故か、というものでした。岡はこの「問い」を、攘夷論者の国際関係認識、という視角から迫ったわけです。

岡はこの論文を書き上げた翌年の一九三六（昭和一一）年からイギリスをはじめとする欧州に留学し、イギリス公文書館においてイギリス側の史料を閲覧する機会を得ました。幕末における日本側の外交史料の刊行もまさにこの年からなされていきましたので、岡は幕末維新期からの日英双方の外交史料を分析した初めての研究者といえます。吉野は、新政府の外交方針の国民への説明の画期性（万国公法Ⅱ国際法は天道と同じなのだ）と説明しましたが、岡は明治初年の転機を今少しパワーポイントイクスに重点を置いて説明しました。

つまり、開国和親に転ずることができたのは、（i）政府によって天皇の外国公使謁見が可能となったこと、（ii）攘夷犯罪についての取締方法が強化されたことの

ほか、(…iii) 外交指導者としての為政者の気迫に見ていたのです。一例として岩倉具視をあげておきましょう。岩倉は、イギリス公使パークスに次のように語りかけていました。

「貴下は（日本と諸外国との勝負を）六歳の小児と力士とを取組ますのと同じに論じられるようである。しかし、わが国には（一寸の虫にも五分の魂）という諺がある。体小なるものでも、しばしば内に大いなる精神を秘めている。貴下は宜しくわれわれに対して実力の行使を云々すべきではない。わが国は小である。わが国民は少数である。けれども、しかし、わが国民は抵抗するであろう。実力の行使を仄かすことは、徒らに敵意を唆るのみである。先進諸国は宜しく、われわれに忠告し、われわれを説得することに力むべきである。これこそが、われわれに接する唯一の正しい途である。われわれの側の不合理的行動は、もとより復讐に価するであろう。しかし、実力の行使によって日本を文明の域に導こうとすべきではない」。

読んでいて興味深いのは、このような岩倉の発言を、パークスが「彼（岩倉）が日本に外国軍隊の駐屯してい

ることを不面目と考えているのを知って、私（パークス）は若干うれしくなった」との感想とともに書き留めていることでした。岡は、外交史料を突き合わせることで、岩倉とパークス間の白刃の斬り結ぶ瞬間を切り取ることに成功したといえるでしょう。

四 日本近代の特色を考える歴史学の始まり

さて、ここまでは、近代を対象とした歴史学の始まりについて二人の学者を取り上げて話を進めてきました。本来の授業では、この後に、牧原憲夫『明治七年の大論争』（日本経済評論社、一九九〇年）や同『客分と国民のあいだ』（吉川弘文館、一九九八年）などが提起した「問い」を詳しくみてゆきます。牧原の「問い」とは、次のようなものです。すなわち、近代的政治的意識は明治初年に忽然とわき出たわけではなく、普通の人々の間に生じたのは客分意識ではなかったか、と。この牧原の「問い」について、牧原の「問い」が吉野の「問い」を補完するのみならず、それでは、客分意識が何をきっかけに消滅し、政治意識へと転化を遂げたのか、またそれ

はいつのことだったのか、などを考えます。

さらに実際の授業では、一時間をかけて、遠山茂樹「征韓論・自由民権・封建論」（遠山『明治維新』、岩波現代文庫、二〇〇〇年）と、坂本多加雄『市場・道徳・秩序』（創文社、一九九一年、のちに、ちくま学芸文庫）を用いて、征韓論の起る背景について、国内改革要求と対外硬論との内在的な関係を探りますが、ここでは省かざるをえません。

（一）宮地正人

近代を対象とする歴史学の誕生を確認した後には、日本近代の特色を考えるために、二人の研究者の著作をみておきましょう。近代国家としての日本近代を考える際、たしかに他の国家とは異なる特徴を持っていたのではないかと考えられます。そのような点を実証的に検討した歴史学の一つめとして、宮地正人『日露戦後政治史の研究』（東京大学出版会、一九七三年）をあげておきましょう。宮地がテーマとして設定した「問い」は二つありました。一つは、日本の近代社会の性格とは何か、二つは近代日本という一帝国主義国における民族と民族運動は、如何なる展開を見せたのか、という問題です。

宮地は冒頭で以下のように述べています。「私は柳田民俗学でいうような、政治の場面とは切りはなされた常民社会的なものをあつかう意図はない。私が自己の課題であつかおうとしたのは、西欧のような近代市民社会を形成することなく世界資本主義の一環に編入され、自己自らも帝国主義強国に強行的になりあがつていった日本における近代社会とはなにかということであり、政治から分離した静止状態のそれではなく、政治によって創出され、また自らの内在的圧力によって政治を変革していくこうとする、そういった日本近代社会のもっている諸問題である」。

つまり、「政治」と常に斬り結んでいる「社会」を対象としたいとの意気込みがあるのです。宮地の本が明らかにしたことは二点です。一つめは、一九〇〇年代から二〇年代初頭にかけての日本の農村と都市を研究対象に設定し、この時期の農村において、村落共同体的諸要素の破壊と、「国家のための共同体」としての町村の構築が進行したことを、地方改良運動や、部落有林の統一政策、報徳社の働きについての実証的分析から説得的に明らかにしたことです。二つめは、明治国家が、日露戦後、

諸列強に対峙しうる財政的・経済的・社会的基盤を整備するために、内務・文部・農商務省などを総動員してうちだした農村への諸政策をとりあげて、農村の蒙った劇的な変化をとらえたことです。

宮地はマックス・ウェーバー『新版 国民国家と経済政策』（田中真晴訳、未來社、二〇〇〇年）の手法を用い、資本主義国家の仲間入りをめざした明治維新时期に、富国強兵と国民動員のため多くの変革が試みられたのと同様に、帝国主義国の仲間入りをしようと必死の努力が行なわれた日露戦争後第一次大戦にかけての時期において、国富増強、国民の共同一致をめざした変革が、国家によって試みられたことを明らかにしたのです。明治維新後と、日露戦後の、日本の奮闘がパラレルに捉えられている点が新鮮でしょう。

興味深いのは、日露戦後に起こった世界列強による経済競争に負けないために明治国家が強いられた緊張を表現するのに、宮地が部落有林の合併問題を取り上げたことです。山県有朋が断行した一八八八（明治二一）年の町村制の導入時においてさえ進行しなかった部落有林の合同が、日露戦後の地方改良運動のなかでは推進された、

というのです。町村制施行は、それまで七万ほどあった町村を一万ほどに統合してしまった大きな変革でした。しかし、その時においてもなお部落有林の合同は進まなかったのです。日露戦後の明治国家の必死さがよく伝わる分析視角になっていると思います。

（二）季武嘉也

日露戦後において、明治国家を挙げてなされた地方の再編成と同様のことは、実は第一次世界大戦後にも起こっていました。この点を明らかにしたのが、季武嘉也『大正期の政治構造』（吉川弘文館、一九九八年）です。本書の面白さは、大正時代を、政党政治によって達成される目標が何であったのかという視点から探ったところにあります。政党政治が目標として掲げた課題としてはこれまで、①社会政策の充実、②緊縮財政、③協調外交路線など、三点くらいにまとめられていました。しかし、上記の三つの目標は、考えてみれば必ずしも政党政治固有の目標ではありません。たとえば、①の社会政策の充実は官僚の方が熱心でしたし、②の緊縮財政については、政党とはいえ政友会系は熱心ではありませんでした。また、③の協調外交については、対外硬を論じ

た政党も根強くありました。

しかし、大正期を通じてみると、大正期の政治家には、ある程度共通する傾向のあることが見えてきました。それは、第一次世界大戦に象徴される世界的な動揺の中で、おそらく国家間競争が経済的側面を中心に激しくなるとの予測の下に、それに対応する政治的体制、国策をいかに築くのか、という問題関心に強く動かされていたということだと思います。彼らは、さまざま挙国一致論を唱え、その重要だと考える挙国一致の内容に従って離合集散を繰り返していました。原敬なども、大戦後、日本と欧州列強との間で、中国大陸を対象に経済すなわち貿易及び利権獲得を中心とした国家間の抗争が激烈になることを予想し、その対応に余念がなかったのです。大正期の政治家の、危機対処法として注目されるのは、危機を経済・産業問題として捉えるのではなく、国家的問題として対処しようとしたことでした。

五 おわりに

さて、十五分で読む日本近代史入門講義も終わりの時

間が近づいてまいりました。以上のように考えてきますと、明治維新期、日露戦争後、第一次大戦後、というように、日本は戦争の後において、次なる国家目標のために、内政と外交を貫く政界再編成を行なってきた国であるということがわかります。

実際の講義では、この後、「転換期を対象とする歴史学の始まり」と題して、二人の研究者の著作を紹介することにしています。有馬学氏と伊藤隆氏です。ここでは、有馬学『日本の近代 第四巻 「国際化」の中の帝国日本』（中央公論新社、一九九九年）と『日本の歴史 第二三巻 帝国の昭和』（講談社、二〇〇二年）の二冊の名前を挙げるにとどめます。昭和に関しては、伊藤隆『昭和初期政治史研究』（東京大学出版会、一九六九年）をあげたいと思います。伊藤の分析手法は、浜口内閣及び民政党、海軍、元老及び宮中勢力、政友会、貴族院、陸軍、枢密院、平沼系、右翼、新聞・「世論」という、一〇の政治集団を取り上げるものです。政治集団がそれぞれの置かれた状況において、利害を通じての対立・連携を行なうさまを活写したものです。今申し上げた部分、大正・昭和の転換期を対象とした歴史学については、す

でに論じたことがありますので、拙著『戦争の論理』（勁草書房、二〇〇五年）中の「政治史を多角的に視る」をご参照ください。

加藤陽子（かとう・ようこ）

現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。

著書に『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』（朝日出版社）、『シリーズ日本近現代史⑤ 満州事変から日中戦争へ』（岩波新書）、『戦争を読む』『戦争の論理』（勁草書房）、『戦争の日本近現代史』（講談社現代新書）、『徴兵制と近代日本』（吉川弘文館）、『模索する一九三〇年代』（山川出版社）など。

15分で読む日本近代史入門講義・ブックガイド

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
岩波書店	4003190036	漱石書簡集	三好行雄編	760	1990
未来社	4624110611	ドイツの歴史家 第1巻	ハンス＝ウルリ ヒ・ヴェーラー編	2500	1982
未来社	4624110628	ドイツの歴史家 第2巻	ハンス＝ウルリ ヒ・ヴェーラー編	2200	1983
未来社	4624110635	ドイツの歴史家 第3巻	ハンス＝ウルリ ヒ・ヴェーラー編	2200	1983
未来社	4624110642	ドイツの歴史家 第4巻	ハンス＝ウルリ ヒ・ヴェーラー編	2200	1984
未来社	4624110659	ドイツの歴史家 第5巻	ハンス＝ウルリ ヒ・ヴェーラー編	2200	1985
東京大学 出版会	4130421133	概説日本経済史 第2版	三和良一	2500	2002
岩波書店	4000919418	吉野作造選集 11 開国と明治文化	松本三之介解説	品切	1995
岩波書店	4000917568	岡義武著作集 6 国民的独立と国 家理性	坂井雄吉解説	品切	2001
日本経済 評論社	4818816091	明治七年の大論争 OD版	牧原憲夫	3400	2003
吉川弘文館	4642037006	客分と国民のあい だ	牧原憲夫	2600	1998
岩波書店	4006000325	明治維新	遠山茂樹	1200	2000
筑摩書房	4480090850	市場・道徳・秩序	坂本多加雄	1500	2007
東京大学 出版会	4130200349	日露戦後政治史の 研究	宮地正人	7400	1973
未来社	4624934248	国民国家と経済政 策	マックス・ウェー バー	1500	2000
吉川弘文館	4642036825	大正期の政治構造	季武嘉也	7000	1998
中央公論 新社	4124901047	日本の近代4 「国際化」の中 の帝国日本	有馬学	2400	1999
講談社	4062689236	日本の歴史 23 帝国の昭和	有馬学	2200	2002
東京大学 出版会	4130300209	昭和初期政治史研 究	伊藤隆	品切	1969
勁草書房	4326248353	戦争の論理	加藤陽子	2200	2005